

井上明芳 提出 学位申請論文

『文学表象論・序説 小林秀雄・横光利一——文学言説の境界』 審査要旨

論文の内容と要旨

学位申請論文である井上明芳『文学表象論・序説 小林秀雄・横光利一——文学言説の境界』は、第Ⅰ部「文学言説の表象諸相」、第Ⅱ部「小林秀雄・批評表象をめぐって」、第Ⅲ部「横光利一・表象の局面、強度」、第Ⅳ部「境界の表象へ」の四部構成となっており、三百九十一頁に及ぶ論考である。その研究テーマは標題に見える通り、近現代文学作品の本質が虚構の言語行為であることを見極めた上で、それをへ文学言説として認定する。次に、この言説の特質として読みの経験における表象作用、すなわちへ文学言説からへ作品としての実像を喚起していく機能に注目し、これが起動する契機としてへ境界」という概念を見出し

ているところに特徴がある。この研究課題の背景には、一九八〇年代から近現代文学研究の領域を中心として広まっていった「テクスト」概念に基づく研究理論と、それが開拓した文学作品の言語論的認識を踏まえるが、その理論自体が孕んでいた対象作品の認定評価に関わる相対主義の陥穽をいかに回避するかという「テクスト」概念導入以降の問題を、文学言説の機能によって生成する表象喚起の作用について行為論的な批判を徹底しようと試みた研究である。その理論的な構造は、文学言説における、書くこと・読むこと・語ること・読者・語り手・作者という従来の文学研究上の基本概念のどれも特権化せず、それぞれの事項が関係論的に生起しあい、機能しあう動的な過程を想定する。そして、これを駆動する要因としての「遅延」と、それらの概念が生成してくる契機としての作用を「境界」という上位概念として提案する。こうした作業仮説を踏まえて個々の作品を「文学言説」として分析し、「文学表象」の顕れとその実像のリアリティの寄って立つ起源を把握しようとするものである。

第I部では芥川龍之介「羅生門」、太宰治「走れメロス」、国木田独步「牛肉と馬鈴薯」という近現代文学研究及び国語教材研究の双方でも代表的な作品を取り上げ、それらの「文学表象」がいかなる読書行為の機構によって生成するかが分析される。1の「羅生門」論では、小説・物語の中の人物について特権的な位置を持っていたはずの「語り手」・「作者」が語る対象として注視する「下人」と「老婆」を客観的に語りきれていない言説の仕組みを詳細に分析し、物語の成立自体が相対化してしまう様相を導き出す。果たして他者を十全に認識し、これを語り尽くすことは可能であるかというアポリアを核心部に潜ませているのが「羅生門」の「文学言説」であるとする。2の「走れメロス」論では、メロスを勇者として語ろうとする強いベクトルを有する物語言説が、その裏面に胚胎している犠牲物語を同時に発動している点を指摘し、ここでも登場人物に関わる物語生成へ向かう「語り」とそれに誘導されてしまう「読み」が、もう一つの物語に気づくことによって挫折させられてしまう事態を考察し、メロスを勇者へと仕立て上

げる読みを相対化する〈文学言説〉の潜在的なベクトルを見出している。また、3の「牛肉と馬鈴薯」論では、登場人物間の会話によって成立する構造に注目し、会話の本質が局面的に継続する言語行為であり、意図や思考が常に〈遅延〉して導かれ、会話の目的であり主題であるべきはずの「理想と現実」という話題自体を解体してしまうこと。そしてその先に会話に挫折した結果として「岡本の手帳」が記述される要因があったことを予測しつつ、語る行為がその度ごとに解体する会話主体の「苦痛」において語り得ないことを語ろうとする「独白言説」生成の契機を把握する。そして第Ⅰ部の結論として4の「詩的言語への前哨的素描」が置かれ、折口信夫、萩原朔太郎の詩を中心に、詩的言語の発動において人間存在と不即不離な認識論が構成され、その結実としての詩作品の〈表象作用〉が生成する過程を検討する。そして詩において行使される言語のありようが、詩人の主観性と詩が提示する全体性を共に開示しうる〈境界〉の機能であることを論じ、第Ⅰ部の理論的な展望を詩的言語論として提出している。

第Ⅱ部は小林秀雄の批評の初期作品から戦後までに形成されていく〈私〉と〈歴史〉への探究と、その帰結として「無常といふこと」に示唆される〈私〉の変容、そして〈読者〉をも生成する機能を考察する。また、小林秀雄研究においては批評する対象への分析考察、価値評価の記述に主眼があるのではなく、対象との遭遇を〈事件〉と捉え、それによって動かされる経験自体を言語化することに主眼を置き、小林秀雄の〈私〉と読者の〈私〉を共に生起させる仕組みを潜在させた特異なテキストとして論じていく1の「様々な意匠」論から開始され、2の「Xへの手紙」論では、一人称「俺」として語られる書簡形式の文章が反復して召喚する「君」という読者へ、メッセージよりも言葉自体が先行し、そこで整序された表現においてのみ〈私〉という概念が把握されるという関係論的認識に基づいた存在論の試みを指摘し、「俺」と「君」の〈間〉を生成する言語こそが関係の「橋」として機能するという、本論文の基本理念としての〈境界〉概念の端緒を提出している。また3の「私小説論」の検討において、戦前期の小林秀

雄作品に胚胎していた「私」の問題を、自己が如何にして自己たり得るかという問題を、小林の言う「私の征服」という表現の内実として見出し、文学テクストにおける「私」の追求とは、その表現自体のリアリティの問題と接続していたことを明らかにする。また、この「私」の問題は、正宗白鳥との論争を扱った4の「思想と実生活」論争の考察では、小林秀雄の絶筆となった「正宗白鳥の作について」での小林自身の回想を手がかりに、昭和十一年に行われたトルストイの家出と死に関する二人の論争において、その時点では語られることのなかった正宗白鳥自身の「私」を、かつて小林が論じてきた作家の「宿命」の相の下において再発見していると論じる。5の「私」の問題と「歴史」観の接続」では、語ることに即ち言語行為の発動によってはじめて過去が出来し、語ることに現在が過去自体を創出する以上、その語り方において過去と歴史はその姿を顕在化するという思考を小林の「歴史について」から導きだし、ここでの語る行為が、「私小説論」の前後から執拗に探究されてきた虚構においてこそ顕現する「私」の表象と

重ね合わされて提出されたものであるとする。そこで、なぜドストエフスキー論の前提として「歴史」に言及しなければならないのかを、歴史的対象の再現における必須項目として、今ここにおいて「語る私」の再確認が求められたからだと論じる。6の「無常といふ事」論では、小林の言う「ある満ち足りた時間」とは、「自分が生きている証拠だけが充満」しているという経験であることを示し、それは、例えば兼好法師の言葉と世阿弥の言葉を貫いて、対象と相対して自らの言葉をその度ごとに組み替えていく行為のことである。即ち、「唯独り在るのみこそよけれ」という孤独においてこそ自分の言葉を整える契機があり、これが西行や実朝、また「平家物語」に「叙事詩人の伝統的な魂」を掴むことに繋がっていくとする。「伝統とは現に眼の前に見える形ある物であり、遙かに想い見る何かではない」という伝統への回帰を示唆することも、対象と相対して言葉を紡ぎ出すことで生成する自己、それが日本語において生きている自己であるという発見であったと論じる。7の「個性」をめぐる「は小林の「川端康成」論

を検討して、川端康成が、かつて記した「十六歳の日記」を自ら読み直した時、そこに自己の個性を改めて発見したという記述をめぐって、自らの個性を発見しそれを信じることでしか自己表現を獲得できない作家の宿命に言及し、ランボー論以来反復して現れる「宿命」論の展開の一つとして取り上げている。

第Ⅲ部は、横光利一の「機械」から「上海」、「旅愁」そして「夜の靴」に到るまでに生成、獲得されていく小説言説の多様なベクトルを分析し、横光作品が提出する文学表象を解明しようという試みである。1の「機械」論は、一人称の語り手へ私∨が自らの経歴を語り出すが、それをへ私∨とその周囲とを共に過去にあつた出来事として確定しようとしながらも、その直前の地点に止まることで、物語化が停滞し、ただへ私∨が語ることによってへ私∨になろうとする指向性のみが産出され、前景化するという、「機械」の語りの特異な方法について新たな立論の展開を図っている。この横光作品における特殊な語りの方法については、2の「上海」論においてその展開を考察し、登場人物各人において語られる物語

の局面性、語る行為自体の放棄とも言うべき指向性の存在を指摘している。3の「旅愁」論及び4の「梅瓶」論は、山形県鶴岡市に寄贈された横光利一の遺品・自筆原稿類の資料調査を踏まえて、計六十一枚に及ぶ自筆原稿の翻刻作業を中心に考察されたものである。5、6、7は「夜の靴」研究として一貫性を有しており、5の「贈与としてのへふるさと」では、戦中期に横光が疎開していた山形県鶴岡市上郷での見聞日記について、実地研究によって虚構性を摘出し、「ペンを持つものの労働」の本質を敗戦という重い経験へ対峙させつつ同時代を超えた時空における読解を準備していたことを示している。6の「物語空間の位相」では、「夜の靴」の生成過程を精査し、初版本文が初出本文より先行していたという特異な事情を論拠に、作品内に定位している上郷の地が観察可能、検証可能な具体的な土地から、作品内で読まれる対象Ⅱ虚構として生成していく契機を分析している。また、7の「見出されるへ祈り」では、敗戦後の動揺に即応しない生き方を示す人物造型をあえて描き出し、混迷を極めた現実に翻弄されることが

なかった生の有り様が虚構化された作品内時空においてこそ成立していると論じる。

第Ⅳ部「境界の表象へ」は結論として永井荷風「腕くらべ」、森敦「月山」を扱う本論文の要であり、今後の展開を示唆しようとする新たな虚構論を模索している。1の「腕くらべ」論は、その物語言説の特質として登場人物の類型化によって類型的な物語形成がなされているが故に、表層的かつ現実への遡及が不可能な虚構となっており、いわば歴史性が最初から欠如しているとし、状況からの逸脱を志向する人物がそれを拒否され続けることで、閉じ切られたフィクションとして、作品世界への回帰を反復する機構であると指摘する。2の「境界」化するテキストは森敦「月山」論であり、かつ、本論文全体の結論をなすものである。森敦の文学理論の核となる「内部外部論」の成果としての作品評価が可能かどうかを問うこの論考は、語りの方法によって物語の外部と内部が相互補完的に生成しつつ、語り自体がその両者の契機となる「境界」となって機能していると

論じ、その語りに遅延しながら常に現在時に、局面的に成立していく「私」の表象が、作品の表象、すなわち「生」と「死」とを同時に紡ぎ出す「月山」とともに顕在化する構造を考察する。この「月山」論において本論文が提案する文学言説の「境界」性という概念の内実が追求されている。

論文審査の結果の要旨

井上明芳氏の文学研究は、小林秀雄研究への問題意識に出発するものであり、文芸批評というジャンルの言説そのものを研究することへの問いから開始されている。そしてこの問いの方向性は、小林秀雄が選択したある対象への言説として成立したものを、さらに対象化して研究言説を構築していくという従来の小林研究の方法をそのまま推し進めていこうとするものではない。言い換えれば、小林の批評言説の力によって動かされてしまう読者のあり方を批判的に超越しようと

いうものではなく、現実に関心を持たれている読者としての自己において表象されたものに焦点を合わせ、この自らの経験の性質と強度を、小林秀雄の批評作品において、いかにして言語化していくかということ課題として来たものである。この小林研究においての成果は、小林秀雄の批評主体としてのあり方が、その読者における「私」が「生きて在ること」を開示していくという過程を見出したところにあるだろう。そして、こうした探究が横光利一作品その他の近現代文学、特に小説作品の研究へと向けられていくところに、物語行為を単に分析し、対象化して論述するにとどまらず、現に進行中の読書行為そのものの機能をいかにして把握するか、という難題を見出したと言えるだろう。そのため、井上氏の諸論考の分析は、表現言説として記述されていることの検討とそれを読んでいる読者主体の検討とが原理上切断できないという地点を常に意識しており、結果として極めて難解な文体を構成していることは否定できず、分析過程の記述における共有化への配慮が今後の課題である。しかし、そうした小説作品研究において設定さ

れた問題提起と結論は、従来の作品研究の水準とは異なる視点を提供し、かつ、大きく飛躍させるに足る問題提起を内包していると評価することができる。さらに、横光利一作品「夜の靴」の自筆原稿等未発表資料の十五年間にわたる発掘・調査とその分析成果は、いわゆる実証研究の着実な方法を踏襲しつつ着実な成果を挙げていることは特筆に値するものであるし、今後も継続されるこの分野の研究には大きな期待が寄せられるものである。

本論文全体を俯瞰すれば、そこに三つの特質が見いだせる。一つには本論文の基盤を形成する本書第Ⅱ部の小林秀雄の作品研究である。そこではほぼ戦前期の批評作品を時系列に論ずる体裁をとっているが、その分析、考察の特徴は、小林の批評が彼自身の個人的な経験に根ざしつつもそれを一般化して共有化を図るのではなく、逆に一般化しえない個性の深層へと探求を進める表現を指向するものであり、それへの読書経験において、書き手と読者双方の存在証明が連動して表象されるといふ事態を見据えた上での考察をする。そしてこの論点は従来の小林

秀雄研究の乗り越えるべき根本問題を指摘するものと言える。

二つには、第Ⅰ部全体と第Ⅲ部の横光利一の作品研究であり、これらには井上氏自身の文学研究の原理論に関わる言及を随所に織り込んだ形で作品分析を進めていくという構造を有する。その原理論を集約すれば、「他者を語ることの不可可能性」の探究を主題として展開されていると言えよう。たとえば、芥川龍之介「羅生門」論の、「作者」によって物語られる「下人物語」が、その「作者」に統括されている登場人物であるはずの「下人」自身の行為によって破綻させられるという論点は、膨大な先行研究が構築してきた研究の水準を、また別の観点へと誘うものであるし、太宰治「走れメロス」論においても、「友情と勇気の物語」としてそのまま特権化するか、あるいは相対化への欲望だけを先鋭化させて、既に煮詰まった観のする先行研究諸論の盲点を突く論点を提供することに成功している。また、本論文の問題提起の核心部分に置かれている「境界」という概念について、それが読書行為に潜在的に働きかける機能を有し、テキスト生成の本質

的な契機となっていることを、作品研究とともに論じている第Ⅳ部の森敦「月山」論が、井上氏の文学研究への方法論を具体化しようとした論考と考えられるが、この「境界」概念が文学言説をリニアに読み取っていく行為において、原理的かつ権利上に存在する動きを示し、作品と読みとを共に生成する起源を示唆しようとするものであることは見て取れるが、文学研究の現状に対しては、果てしない相対化を促すだけの批判に止まる恐れがある。つまり、ある特定の読みに対して、それを生産的に審議する機能をも考慮に入れた理論構成が望まれるし、本論文の作品研究の下支えともなるべき物語行為・読書行為の展開を強化する虚構の言語理論のより詳細な整備が必要とも考えられる。

三つには、横光利一「夜の靴」、森敦「月山」の自筆原稿類を精査し、作品の生成過程を検討する実証的研究の展開である。これまでに未開発であった研究対象であり、過去十数年間にわたる井上氏の研究課題であるが、その成果の一端を本論文に提示している。しかし、これは現在もなお進行中であり、今後どのような

な研究成果が現れるか大いに期待するものであるが、こうした従来からの実証研究の方法において対象化されたテキストがどのように作品化されるのか。そこに本論文の文学理論はどのように接合されていくのか。この大きな課題を背負っていることを指摘しておきたい。

以上の三点は、本論文の特質として他に見られない独自性を有するものであるとともに、それぞれに今後の課題を有するものでもあるが、近現代文学研究自体のあり方への再検討を迫るものとして有意義であり、豊富な問題提起を内包する知見に満ちていると評価できるものである。よって、本論文の提出者である井上明芳氏は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成二十六年 三月十一日

主査

國學院大學教授

石川 則夫

⑩

副査

國學院大學教授

上田 正行

⑩

副査

北海道大学大学院教授

中村 三春

⑩